

令和 8 年度入学 社会福祉学部 社会人選抜 試験問題の出典

種別	大問番号	著者名	著作物名	書名等	版元
小論文	一	谷岡 一郎	「社会調査」のウソ —— リサーチ・リテラシーのすすめ	2000年 pp.191-194 より 一部改変 文春新書	文藝春秋

社会福祉学部

小 論 文 (90 分)

注 意 事 項

1. 試験開始の合図があるまでは、この問題冊子の中を見てはいけません。
2. この冊子は、2 ページあります。なお、下書き用紙が 2 枚あります。
3. 試験中に問題冊子及び解答用紙の印刷不鮮明、ページの脱落などがあった場合は、手を挙げて試験監督者に知らせなさい。
4. 解答は、必ず黒鉛筆（シャープペンシルも可）で記入し、ボールペンや万年筆などを使用してはいけません。
5. 解答用紙には、氏名及び受験票と同じ受験番号を忘れずに記入しなさい。
6. 解答は、必ず解答用紙の指定された箇所に記入しなさい。
7. 下書きの必要があれば、下書き用紙を利用してかまいません。
8. 試験終了後、問題冊子と下書き用紙は持ち帰りなさい。

次の文章を読み、あとの問いに答えなさい。(配点 100 点)

これほど社会調査が増え、それも玉石混交ということになってくると、それらのリサーチが本物であるかどうかを見極める能力が必要になってくる。本書の主眼はまさにそこにある。つまり「リサーチ・リテラシー」の提唱である。「リテラシー」という語は、いまや流行の^{はやり}ようで、いまさら使うのも気が引けるが、他にぴったりくる言葉が思いつかないのでお許しいただきたい。

「リテラシー」とは、要するに基本的な「読み書き」能力のことである。例えば「メディア・リテラシー」(マスメディアの記事を見分ける能力)とか「情報リテラシー」(情報機器の概念を認識し使いこなす能力)といったふうに使われる。

なぜリサーチ・リテラシー教育が必要かといえ、人々のリサーチに対する無知につけ込み、ゴミの情報を流す者、それを広める者、それを利用する者たちが、あまりにも多いからである。これらの者に対抗できる能力を持たない限り、今の、そしてこれからの社会では、損ばかり重ねる不幸な人間を生み出すだけである。

現在のコンピュータの処理能力は、とてつもないレベルにまで達している。かつては 1 年以上もかけて計算していたある種の変数解析も、今では瞬時に処理を終えてしまうばかりか、ご丁寧に間違いの可能性のある箇所まで教えてくれる。学生時代にこんな機器があったら膨大な時間が節約できたのに、と思う学者は筆者だけではなく。しかし、この便利さが落とし穴となることもあるのだ。

逆説的ではあるが、機器の分析能力が便利になればなるほど、それを扱う人間の能力には一定以上のレベルの、目的、知識、倫理観、そして哲学が要求されるようになる。確かに今の機器は便利すぎるほど便利で、誰でも簡単に、何でもできてしまう。それだけに、正しい使い方を知らない者に扱わせるのは、小学生にマシンガンを与えるのと同じである。

(中 略)

このリサーチ・リテラシー教育は、できればコンピュータの本格的な知識と並行して学ぶのが望ましい。ただし、多くの概念には統計学という前提が存在するため、中学ないし高校から統計学を教えることが求められる。その場合、統計学の知識は概念的なものでよく、小学生高学年か中学生レベルで修得可能なもので十分であろう。ともすれば統計学は退屈で難解なもののような印象があるが、ことさら難しくしているから難しく感じるだけのことで、教え方次第では楽しい学問になりうるはずである。

その上で、高校ないしは大学に、リサーチ・リテラシーを教える何らかのクラス(例えば「社会科学方法論」や「社会調査論」など)を用意すべきであると考え。

情報機器やシステムの進んだ現代では、他人より、より多くの情報を集めることを競っても意味がない。情報など、集めようと思えばいくらでも集められるからである。むしろ今後、必要となるのは、あふれるデータの中から真に必要なものをかき分ける能力、いわゆる「セレンディピティ」と呼ばれる能力であろう。このセレンディピティを訓練するにあたっては、まずゴミを仕分けることが効果的である。つまりデータをどう「捨てる」かである。

データや社会調査の情報はだいたい 3 つに分類される。役に立つ有益なものと、目下のところは役に立

たないが将来的に必要となりそうなもの、そして「ゴミ」の3つである。数量的にはこの最後の「ゴミ」が圧倒的に多いが、この「ゴミ」をすぐに捨てることのできる人は、そうでない人より、かなり有利なポジションを占めることになるだろう。この能力がリサーチ・リテラシーのある人とない人の差となる。

もう一度、繰り返すが、今後は情報を得る能力よりも捨てる能力の方が、はるかに重要な素養となってくる。

(谷岡一郎『「社会調査」のウソ ——リサーチ・リテラシーのすすめ』, 文藝春秋, 2000 年, pp.191-194 より, 一部改変)

問1 本文の内容を, 300 字以上 350 字以内で要約しなさい。

問2 「リサーチ・リテラシー」に対するあなたの考えを, 具体的な経験を踏まえて, 600 字以上 800 字以内で述べなさい。